

第2章 全国ポリオ会連絡会の活動

全国ポリオ会の成り立ちと各地の会の活動

私がポリオネットワークを、さらに、 全国ポリオ会連絡会を始めたわけ	55
各地のポリオ会紹介	65

検診会プロジェクト

ポリオ検診会について	68
「ポリオ相談会」について	エンジョイポリオの会 69
ポリオ定期検診の経過	ポリオ友の会東海 73
ポリオ検診会実現への経過と現状	ポリオネットワーク 78
ポリオ受診紹介状	82

所得補償プロジェクト（障害年金）

栗林勉の障害年金講座	86
障害年金の成功事例に学ぶこと	98
障害厚生年金決定に際して	104

JDAプロジェクト（私達が訴えたいこと）

障害者制度改革について考える	106
障害者差別禁止法に求めるもの	112
とても小さな活動です	117
「障害のある子ども」だったボクが知らなかったこと	118
権利とわがままのさかい	122
車椅子から見た街	124

補装具プロジェクト

50歳の挑戦！！ やっと出来ました	127
私と装具	131
腕を支えるベスト	133

国際情報プロジェクト

PHI 第10回国際会議報告	135
DBS装具との出会い	136
国際会議場での「ナムミヨウホーレンゲキョウ」	138
コペンハーゲン国際会議報告	140
二度目のポリオ国際会議	141
スプリングでスキップ	142
デンマークで電車（エストー）に乗る	143
コペンハーゲン国際会議に旅して	145
(翻訳記事)		
車椅子利用者のために改良すべき点	148
サンフランシスコでの悪夢	150
補装具へのためらいを止めて、愛用するに至った道すじ	152
Q&A :ポストポリオ症候群経験者にとっての冬の苦悩	155
冷え性 : どうして私たちはこの問題に悩まされているのか?	157
ポストポリオ症候群で経験する異常な疲れ	160

権利とわがままのさかい

北のポリオの会 今田 雅子 (1956 年生)
(北のポリオの会便り No. 36(2008 年 11 月)より転載)

いつもはこのページ、「みんないろいろあっても元気だしていこうよ」という気持ちで楽しいのんきなことを書いています。それを楽しみにしていると言ってくくださるかたも数人いらっしゃいます。ありがとうございます。でも、今回はちょっとまじめなことを、それも長めで書かせて下さい。それというのも、このままでいいのかと思うことがあまりにもたくさん押し寄せて来て、焦っているせいかもしれません。

2006 年 12 月、国連で障害者権利条約が採択され、2007 年 9 月に日本政府の署名がありました。国内の法制度の見直しが行われています。関連の学習会などに出席する機会が何度かあり、自分が障害を持っていることによる権利の侵害を受けた経験について考えています。皆さんは、差別を受けたことがありますか？ それはどんな場面ですか？ すぐに思い浮かぶことはあまりないかもしれません。私もそうです。では、障害ゆえにいやなめにあつたこと、がまんしたこと等はなかったのでしょうか？ そう聞かれるといろいろと思い浮かぶのではないのでしょうか。それがもしかしたら人権の侵害、差別だったのかもしれません。逆に良かったと、嬉しかったことも思い出してみてください。それが権利が守られていた状態だったかもしれません。

随分前に会員さんから聞いたあるプールの対応について。その方はプールサイドを裸足で歩くと足が痛いのでサンダルの使用を認めてほしいとお願いしました。ところがサンダルは禁止です。必要だったら車イスを使用して下さいと言われたそうです。車イスを使うほどおおげさにしたくはないけれど、プール用のきれいなサンダルを用意するからそれを使わせてほしいということがわがままなのか、正当な要求なのか。次に、別のプールでのこと。心臓が悪くて薬をいつも身に付けている必要があり医師から水中の運動をすすめられた方が薬入りのネックレスをして入っても良いか聞いたところ、一般装飾品はダメだけれどそういう事情ならばと許可されました。そこで事情を知らない人から、どうしてあの人だけネックレスをしているのか（自分はずすように言われたのに）という質問があり、プールの監視員の方がきちんと説明をしていました。こちらのプールは裸足では足が痛い人のサンダル使用も許可になりました。この二例のちがいは、現場が合理的配慮をし、それによっておきる説明の手間を引き受ける覚悟があるかどうかだと思います。

権利条約で言われている合理的配慮と、一般の人の理解、きまりを作った側の説明

責任、そして現場の対応について、考えています。日本で障害者差別禁止法ができれば、最初の例のような対応をされて、プールへ行くことをあきらめてしまう人がなくなるのだろうか。現場がきめ細かな一般の人への説明を面倒がって、一見平等のような対応に終わることが実は差別なのだという認識を広く行き渡らせることは、難しいだろうと思いますが、あきらめてはいけないことなのだと思います。そして、一人ひとりがわがままではなく、正当な要求として交渉できる道具としての法律が日本にも必要なのです。

駐車禁止除外の制度について、(署名活動については別に掲載)一般の人の理解はどのようなのでしょうか。これも権利、差別という視点で見て下さい。一見平等の考えからすれば、一部の障害者だけ駐車違反にならずにずるい、という見方をする人もいるだろうと想像できます。公共交通機関では移動が困難だ、車で行くと使える駐車場がない、あるいは駐車場から長い距離の移動ができない、そういう駐車禁止除外が必要な人に駐車禁止除外標章を渡しているんだということを一般の人にきちんと説明し理解してもらうのはその制度をつくった側の仕事だと思います。不正使用に関しては、私たちだって迷惑しています。それはきちんと取り締まってほしいし、それをせずに、不正使用がめだって一般からの苦情が多くて大変だから範囲を狭くしてしまうというのは、筋が通っていないと思います。これもわがままですか？

札幌市の障害者交通費助成制度の見直しが行われています。来年春から削減になるところでしたが、反対が多く、一年検討期間が延びました。道内の他市町村と比べると金額的には札幌市は恵まれています。だからといって財政難が理由の削減を受け入れるわけにはいかない人達があります。交通費の助成があることで、通院や通所がなりたっている人達です。また、障害によっては、カードの使用方法等が変わることで困難が生じる人もあります。収入や個別の違いを考慮しない、一見平等な同額同程度の助成にするというのは、本当に正しいのかどうか。

障害者自立支援法においても、権利の点からみると、どうなのかと思うことがたくさん出てきます。

なにがわがまま、なにが権利として要求しても良いのか。そのさかいを正しく判断できる目を持つこと。その上で、一般の社会でもそれが受け入れられるようにどうすれば良いのか、自分にできることは何か、考えて行きたいと思っています。

いろいろと、へ理屈を書きました。どのように思われましたか。みなさんのお考えを会報用を書いて送っていただけるとうれしいです。よろしく願いいたします。

車イスから見た街

ポリオネットワーク 松本 光雄 (1950 年生)
(全国ポリオ会連絡会 No. 24 (2008 年 2 月) より転載)

私が車イスのお世話になりだしたのは、30 代前半の頃でした。当時、会社勤めをしていた頃、社員旅行があるというので同僚の友人が病院の車イスを借りてでも私を連れて行ってやる、というのです。その頃の私は両足に補装具を付け、松葉杖を使えばほとんど「健常者」と同じ行動をとれておりましたが、社員旅行というやはり迷惑を掛けてはいけないという思いから、躊躇しておりました。そんな中で、同僚の熱心な誘いがあったので車イスで参加したのです。

車イスに乗って見る街の景色はとても素晴らしいものがありました。これまでは松葉杖にすがって外の景色があまり見えなかったのが目からウロコのように感じたものです。すぐに私は役所に申請して車イスを手に入れたのでした。

でも日常は松葉杖。車イスで街に行くのはなんと不便なことでしょう。少しの段差で行き詰まり、車イス用トイレもまだまだ少ない時代でした。でも、転勤をきっかけに会社内では専用の車イスを使うようにしたのですが、何となく窮屈な思いをしたものです。

常時、車イスを使うようになったのは 40 代後半でした。上肢が急に弱くなってきたのです。特に右手指、左肩に筋力の衰えが現れてきました。大学病院で診て頂いた結果、ポストポリオ症候群の発症です。松葉杖をつくのが怖くなってきたのでした。

10 年前に早期退職した私は、今は全くの車イス生活です。家は車イスで移動できるようバリアフリーにしていますが、外出はほとんどヘルパーを必要とするようになってしまいました。

そんな中で出会ったのが、村田稔『車イスから見た街』(岩波ジュニア新書)という著書です。著者は 1 級の障害者手帳を持つ車イスの弁護士です。生後 1 歳半の頃、ポリオにかかり両足の自由を失ったということです。本書の前半は、著者の生い立ちから弁護士になるまでの半生が描かれており、後半は、車イスの弁護士としての一日の生活ぶりと、街に出かけたときに遭遇する車イスゆえの様々な不便が綴られています。

この本について、あるブログに次のような紹介文がありました。「健常者」の視点で書かれたものですが、非常に的確に表現されていますので、ここで引用させていただきます。

(引用については筆者の承諾を得ております。)

本書を読むと、車イスでの生活がどのようなものであるのか、その一端が窺える。もちろん、車イスの人といっても、障害の種類や程度は人によって様々なので、十把一絡げに捉えることはできないが、それでも、私のように車イスの生活に無知ないわゆる「健常者」にとっては学ぶところの多い本である。考えてみれば、私はこれまで車イスの人の生活について知るところがあまりにも少なかった。おそらく多くの「健常者」も私と似たり寄ったりではないだろうか。

車イスの人が街に出ると、どれほど多くの困難や不便や制限にぶつかることか。しかし、そのほとんどは、足が自由に動かないためではない。街の構造がすべて「健常者」の視点だけから「健常者」向きに作られているせいなのだ。言うまでもないが、階段があると車イスはお手上げである。人の手を借りるほかないが、車イスを抱えて運ぶには3～4人の人手が必要である。しかし、スロープやエレベーターがあれば、車イスでも移動することができるのだ。ところが現状では、車イスでは入れない店も多いだろう。著者は知人の葬儀に参列しようと思ったが、家屋やお寺の構造上あきらめざるを得なかったこともあるという。自動販売機も「健常者」が立った状態で使うことを想定しているので、車イスの人には使いづらい。

著者は車の運転もし、新幹線や飛行機やタクシーなどを利用して全国各地に出張し、海外に出かけることもあるという。ところが、著者が住む東京都内のバス、地下鉄、山手線などは使えないという。また、新宿や渋谷で、ほんの数メートル先の交差点の向こう側に渡ろうと思ったら、歩道橋や地下道ばかりで近くに横断歩道がないために、数十分もかけて大回りしなければならないところもあるという。このような街の構造は障害者の人権を全く無視するものだ。

例えば、著者は次のように書いている。

＜私の約50年の人生は、いつも小便をがまんしながらの人生でした。あなたが小便をがまんしなくてもよいのは、あなたの足が動くからではありません。街のなかのいたるところに、あなたの使えるトイレがあるからです。車イスの私が小便をがまんしなければならないのは、私の足が動かないからではありません。街のなかに、車イスで使えるトイレがほとんどないからです。街のなかに、あなたも、車イスの私も、みんなが使えるトイレがあれば、私の人生は変わるのです。＞



移動の自由・行動の自由という最も基本的な自由を車イスの障害者から奪っているのは、私たちの社会である。「健常者」には気づきにくいことだが、このような車イスの人が使えない、もしくは極めて使いづらい街路・建物・施設・交通機関等の構造そのものが障害者に対する差別になっているのである。こういう状態を放置しておくことは許されない。また、私たち「健常者」もいつ病気や事故で障害者になるかわからない。障害者が暮らしやすい社会を作ることは私たち全員のためでもあり私たち全員の義務だと思う。

<追記>

繰り返す。車椅子の人から行動の自由を奪っているほとんどの原因は、彼らの障害にではなく、私たちの街の構造にあるのだ。

私たちは誰もが潜在的には障害者であり、病人であり、高齢者なのだ。

現在、日本全国で500万人を超える障害者がいます。高齢者を含めて、車イスを必要とする人たちは、それこそ数えきれません。障害者差別禁止法（JDA）の制定が叫ばれる今日、未だに街にはバリアが数多くあり、私たち障害者は行動を制限されています。車イスで街に出かけ、何不自由のない思いをしたい…これが私たちのいちばんの願いなのです。



補装具プロジェクト

担当：今田 雅子

子供の頃から補装具を使用して来たポリオ経験者は、昔ながらのものを作り直して使って来た人が多く、高齢化やポストポリオの発症によりその重さが負担になり始め、またこれまで使っていなかった人にも補装具は必要になって来ています。エンジョイポリオの会がある九州では軽いカーボン製のものが早くから使われていました。他地域へもその情報が伝わりましたが、実際に製作できる技術者と出会うまでには至っていない地域もあります。そこで、補装具プロジェクトは、地域の実情を知るため2012年アンケート調査をしました。新技術による補装具も作られるようになって来ています。体への負担を軽減し、ポストポリオを悪化させず、残っている身体機能をなるべく維持できるよう、様々な道具を上手に使いわけて生活することが大切です。ここからは、そのために参考となるものをまとめました。

50歳の挑戦！！ やっと出来ました

エンジョイポリオの会 川野 潤子 (1949年生)
(全国ポリオ会連絡会便り No. 12 (2004年4月)より掲載)

補装具を着けて歩くようになって、早いもので3年が経ちました。ここ1年はカーボン製の補装具を着けてからは、何らトラブルもなく快適に過ごしています。

私は、1歳3ヶ月でポリオに罹患し、右下肢全廃という後遺症が残りましたが、幸い右下肢のみ（左下肢は比較的状态が良い）だったのと、親のしつけと私の努力(?)の賜物で、何とか人並みの生活をしておりました。21歳の時から車の運転をするようになってからは、生活の範囲も広がり、遠歩きの時のみステッキをつくという生活で、特別問題もなく“元気なポリオ”の生活でした。

ところが、7年位前、40代半ば頃から悪い右足の膝が時々痛むようになり、痛みも年々ひどくなり、5年位前からは、仕事の時は右手にステッキ、遊びの時は両松葉杖という不自由な生活になってしまいました。

いくつかの病院を転々としてみたのですが、「ポリオはどうしようもない」「松葉杖をつきなさい」「ポリオは私の診察範囲ではない」…と。私はポリオを治して欲しいと病院に行った訳ではないのに…。また、補装具の相談をしたある義肢装具士は「こんなに変形しては仮に補装具が出来たとしても、貴女が歩けないでしょう」と…。

仕事を少し整理し、松葉杖をついて歩く覚悟もしなければと思っていた頃、友人に誘われてエンジョイポリオの会主催の蜂須賀先生のPPSの講演を聞きに行った折、私と同じような反張膝の会員の方から補装具を作るよう勧められました。平成12年夏のことでした。

子供の頃、何度か補装具は作ったことはあるのだが、あの重さと夏の暑さに耐えられず、何時も長くは続かなかった。無理といわれている補装具が果たして50歳にして出来るものか…そんな思いが頭をよぎりました。当時門司労災病院のPTだった竹村先生も心配して下さり、私が出関ということもあり、同病院の中村先生を紹介してくださいました。

最初の仮合わせでは、補装具を着けて悪い右足に力を入れた途端、補装具ははねて壊れてしまいました。二度目の時は一度目の恐怖から右足に力が入れない状態でした。中村先生はリハビリ室の平行棒に掴まって歩くように言われました。もう、靴なんか履いている場合ではないと、私も裸足になり平行棒にすがって歩いてみました。とても歩けないと思っていましたが、段々右足に力を入れることが出来るようになり、この時、初めて実感しました。補装具を着けて歩けるかも知れないと…。こうして私の補装具作りは始まったのですが、それから2年間は補装具作りに悪戦苦闘の日々でした。

最初の補装具は、重く、40年前と同じ物ができてきました。これは正直ショックでした。宇宙ステーションが出来ようかという時代に補装具の進歩が全然見られなかったからです。材料も相当軽くなりもっと良いものが出来ると期待していたのに…。それでも、補装具が駄目なら、膝の固定手術か、松葉杖かという状態のところまで来ていたので、何とかこの補装具でステッキなしで歩けるようになることを目標に歩く練習を始めました。この間右足はアザが絶えず、体中筋肉痛、腰痛、肩こりとなり、マッサージに通いながら、何とかステッキなしで歩けるようになったのは、1ヶ月後のことです。これで私の補装具作りは終わりのはずだったのですが、これからが補装具との悪戦苦闘の始まりでした。

補装具を着けることで、確かに膝は楽になったのですが、反張膝65度を矯正して私の体を支えるということは、補装具の負担も大変で、金具が何度も折れるという事態に直面しました。2ヶ月で作り替えることになりました。2本目の補装具はアブリ付の軽量のものができ、これはほぼ満足のいく物でした。しかし、この頃には補装具を着けた足の筋萎縮はひどくなっていて、半年もしない内に、できた頃のフィット感はなくなっていました。そこで3本目の挑戦です。これは仮合わせを16回もしたせいも、私の要望が多すぎたのか、最初よりどんどんおかしくなるという代物でした。義肢装

具士が営業と製作者に分かれている為、私の意志が製作者に上手く伝わらなかったことが失敗の主な原因のようです。3ヵ月位は努力して着けていましたが、どうにも馴染めず、ブカブカでも2本目の補装具の方がまだ良かったので戻って着けていました。

この3本目の補装具の製作中だったと思います。蜂須賀先生がエンジョイポリオの会の総会にお見えになって、カーボン製の補装具の紹介をして下さったのは…。歪みがなく軽量のカーボン製の補装具は、筋力の劣るポリオには適しているとの事でした。この時私は先生に色々と質問し、金具が度々折れている現状を訴えました。後日、私の主治医の中村先生にも、私がカーボン製の補装具に興味を示していたことを、蜂須賀先生が自ら伝えてくださったのには恐縮してしまいました。ブカブカの補装具は歩き辛く、しかも仕事をするときは松葉杖をついてはできないので、ここで私は諦める訳にはいきませんでした。業者を替えて4本目に挑戦することを決心しました。

そこで、蜂須賀先生お勧めのカーボン製の補装具が私のようにひどい反脹膝でもできるものかどうか、私は荒井義肢製作所の荒井さんの所へ今まで作った3本の補装具を持って（2本目の補装具は装着していたが）、相談に行きました。荒井さんも私の膝には驚かれましたが、「上手くいくか分からないが、歪みがない分、カーボン製の方が良いかも」と言うことで手がけて下さる事になりました。形は2本目の補装具を改良するという事で、始まりました。まず、仮合わせの補装具を作ってもらい、2週間家に持ち帰り日常生活で使用し支障がないか確認し、荒井さんの所で不都合な箇所を指摘し、手直しして貰い、また、持ち帰り日常生活で試すという事を何度か繰り返し、この状態で良いということになって、始めてカーボンを使って同じものを作ってもらおうという手順ですすめられました。今回は4本目という事もあり、私もかなり細かい部分まで、直接製作者の荒井さんに指摘できたので、今までと違い補装具作りはスムーズでした。何より、荒井さんがポリオの補装具に慣れていらした事や、マンツーマンで対応して下さった事で意思の疎通が上手くいき、期間は3ヶ月かかりましたが、仮合わせ5回と最小記録で完成しました。ちょうど1年前の事です。

できあがったカーボン製の補装具は、今までと違い歪みが全然ないので、足にフィットしていて、足と一体感があります。金具の部分も膝の継手のみですので、軽量です。アブミと本体の継手にはジレットという硬質ゴムを使用してもらいましたが、これは軽く、どんな靴にも柔軟に衝撃を吸収してくれるので快適で気に入っています。3番目の補装具の時、スプリングの代わりにする硬質ゴムを鉄工所の方に教えて頂き、持ち込んで付けてもらっていたのですが、よく折れて上手くいきませんでした。今の時代、私が考える程度の物は既製品であるものです。このジレット、中村先生も荒井さんも耐久性を心配されていましたが、現在迄1年が過ぎましたが、折れることなく

丈夫です。

ポリオの補装具はDrも難しいとおっしゃっています。脳卒中の場合は3パターンの一つに当てはめれば大抵上手くいくそうですが、ポリオの場合は障害も十人十色です。その分、補装具も一律というわけにはいかず、Dr、義肢装具士、患者と3者の根気の要る作業です。自分の意思をDrや義肢装具士にきちんと伝えることが一番重要だと思います。中途半端に妥協すれば結果的には歩けない補装具ができてしまいます。2年間に4本の補装具を作った私ですが、諦めないで良かったと思います。

現在、補装具を一日16時間着けたままの生活ですが、小回りが利かないという不自由な面はありますが、膝の痛みはなくなり歩くことに関しては、快適です。もし、補装具が上手くいかなかったら、今頃松葉杖をつけて歩いていたことでしょう。

エンジョイポリオの会に入会した事がきっかけで、色んな方との出会いがあり、諦めていた補装具ができ、今の私の生活があると深く感謝しています。「上手くいくか分からないけれど、やってみましょう」と言って、熱心に取り組んで下さった主治医の中村先生、荒井さん。仮合わせも2ヶ月を過ぎるとため息をつく私に「先生に任せて頑張りましょう。僕も頑張ります」と言ってくれた2本目の時の若い義肢装具士さん。新しい補装具が出来るたび筋肉痛に悩まされ通ったマッサージ師さん。何時も情報を提供して下さる産業医大の先生方、そして「自分の納得のいく補装具ができるまで何度でも作ればよい。お金と時間はいくらかかってもいいから」と言ってくれた主人や何時も励ましてくれた友人達。本当に有り難うございました。

50歳にして始めて補装具を着けるということは、大変な努力と根気、忍耐が必要でした。今、以前より快適に仕事に家事に趣味の旅行にと元気に動き回っている私です。



私と装具

エンジョイポリオの会 森山 幸恵 (1955 年生)
(全国ポリオ会連絡会便り No. 12 (2004 年 4 月)より転載)

私は 1 歳半の時ポリオにかかり、右足全部と左足の一部に麻痺が残っています。右足は筋力が全くない「ぶらぶら状態」なので装具がないと歩けず、物心ついた時には装具を着けていました。昔の装具は壊れやすくて（私がおてんばだったのかも…）学校で壊れた時には友だちが 3 で交代でおんぶして帰ってくれたこともありました。幼稚園の時に入院した九州労災病院内に義肢科があって、自宅からは遠かったのですが退院後はずっとそこで装具を作りました。高校の時に足関節固定術をして 2 年間だけ装具なしで歩いたことがあります。膝を押さえないと歩けず膝折れして怪我をしたり、膝の反張がひどくなったり行動に制限が出てきたので、大学進学を機にまた装具を作ることにしました。まだ幼稚園の時から私の足を見続けてくれた義肢装具士さんが数人おられたので、モデル取りから仮合わせ、完成まで一人の義肢装具士さんが担当し、完成まで時間をかけて足に合うように作ってくれました。当時は職人芸のようなものだったのかもしれませんが。私は新しいもの好きなので、医師や義肢装具士さんの勧める新しい装具はたいていお試してきました。ポリオの装具はいくつかタイプがあるようですが、必要な機能以外はできるだけ省いて、軽くてすっきりしたものを作るたびに装具士さんをお願いしていました。

九州ではエンジョイポリオの会の会員を中心に産業医科大学蜂須賀教授、荒井義肢装具士さん、ポリオ当事者の 3 者が協力してカーボン製の装具の製作に取り組み、かなり普及してきた感があります。カーボン製装具のメリットは軽くて丈夫なこと、デメリットは完成したら修正ができないことです。私の場合前の装具に比べて約 200 g 軽くなりました。たかが 200 g ですが、毎日 1 日の大半着けているわけで、体への負担はだいぶ違うと思います。まず仮装具を作って 1～2 ヶ月日常的に着けて歩いてみます。あまり長く仮装具を着けていると、本装具ができた時に歩きにくいかもしれませんが、不都合なく歩くことができるかどうかしっかり試して確認することはとても重要です。仮装具の段階で、足に合わないところや歩きにくいところなど不都合な部分を完成前にチェックすることができ、せつかく新しい装具ができたのに足に合わずに歩けず、お蔵入りということがありません。カーボン製の装具だけではなく、他の装具でも仮合わせの段階でしっかり歩きこむことができると、後で手直しをする必要もなく、とても効率的でいいと思います。ただ義肢装具士さんとしてはとても手間

がかかるので、義肢装具士さんの理解と協力がないと実際には実現が難しい現状です。カーボン製の装具と今までの装具の違いは、私にとっては軽くなったというのが一番ですが、すっきりしたデザインは他の会員さんにも好評のようで、私も気に入っています。ちなみに最初に作ったカーボン装具は8年間壊れませんでした。

私はいろいろなデザインや型の装具を試しました。別の型の装具に変えることは勇気がいることだし、実際に新しい型の装具に慣れるのに時間もかかり大変です。私にとって歩きやすい装具が必ずしも他の人にいいとは言えず、一人ひとり個別です。ただ自分が今着けている装具が自分の足や体の機能にあっているのか、変形防止や体への負担軽減になっているのかなど見直してみる必要はあると思います。仲間同士の情報交換も有効です。そして一緒に考えてくれて、根気よく付き合ってくれる義肢装具士さんを見つけることは装具のできの良し悪しにとっても影響があります。装具のつけ具合や歩きにくさ、不都合なところなど自分自身でないとわかりません。装具が合わないとあきらめずに義肢装具士さんを育てるのは私たちという意気込みで訴え続けましょう。うるさいと思われても私たちにとって装具は「足」なので、私たちが言わなければわかってもらえないし、いい装具ができていかないと思います。

私のカーボン装具は足指の機能のぎりぎりのところまで足底を短くしてもらっています。草履や下駄を履くためです。8月にエンジョイポリオの会の役員で花火大会を見に行きました。もちろん浴衣を着て下駄ばきで行きました。自分の納得できる装具、歩きやすい装具ができると動きやすくなって、やりたいことができるようになり、生活範囲が広がったり、楽しいことが増えて生活の質が向上すると思います。私が37歳でポストポリオと診断されてから若干の機能低下はあるものの、なんとかうまく維持できているのは体に合った装具を着けているのも大きな理由の一つだと思っています。今まで装具を着けないで何とか歩いていた人は、装具に慣れるまでに時間がかかり、途中でくじけそうになったりあきらめたくなったり、心身両面で大変かもしれません。でも体や足の変形を防止したり体への負担を少なくして、今の身体機能を維持し動ける時間を長くするために装具はとても有効です。チャレンジしてみませんか。